

# 台湾の地方青少年向け出版物の機能

## ——『南市青年』と政治記事——

高橋明郎

### 0. 導 言

国民党は、青年の思想コントロールのために学校教育に並行して、雑誌による教育誘導を行った。その代表的なものは反共抗俄救國團の主導する『幼獅』であり、これは高等教育の学生を主対象にしているが、義務教育の延長に伴い中学生を意識した『幼獅少年』が刊行された。これらについては筆者は既に幾つかの論考を示している<sup>1)</sup>

これら雑誌による誘導の根拠は、政府の教育部、新聞局、国防部などの政策である。これについても、筆者は民國 65~70 年 (1976-1981) について教育部が中等教育以上の学生に指示した事項を整理した<sup>2)</sup>

そこで整理した内容は、民族教育の挺入れ、伝統的文化教育、愛国教育、国語重視、蔣家世襲の正当化である。

これが政府から雑誌側への要求であるとして、雑誌側はどう対応したのかが次に明らかにすべきことである。『幼獅少年』については、既に簡単に上記論文数編で触れている。ただし、『幼獅少年』はこの時期新たに発行された全国的な雑誌である。しかし、この時期の青少年向け定期刊行物には後述のように地域性の高いものが存在する。そこで、本論文では台南地区で発行された

- 
- 1) 「『幼獅』創刊-救國團と台湾反共文学 (『香川大学経済論叢』 vol. 82-4 2010. 3)」「『幼獅少年』創刊の時代 (『香川大学経済論叢』 vol. 84-4 2012. 3)」「『幼獅少年』創刊期の記事と作家たち (『香川大学経済論叢』 vol. 85-4 2013. 3)」「『幼獅少年』初期の編集 (『香川大学経済論叢』 vol. 85-5 2014. 3)
  - 2) 「台湾の政治・社会と少年雑誌編集-民國 65-70 年代の『幼獅少年』を例に (第一部)」(『香川大学経済論叢』 vol. 87-3, 4, 2015. 3)

『南市青年』という雑誌をもとに、地方雑誌の対応例を検討したい。

### 1. 資料と本論文の検討対象

『幼獅』『幼獅少年』などは全国を対象としたものであるが、出版環境の緩和にともない、より小規模な印刷物の刊行がはじまる。一つは、曾ての旧制中学、義務教育延長後は高級中学が発行していた校内雑誌（以後「校誌」）である。これらは多くの学校で継続されていたが、それを類型とするような校誌が幾つかの新製の国民中学に於いても発行された。そしていま一つは救國團が各地に持っていた支部が独自に刊行を開始した地域密着の青少年雑誌である。

これらの今日までの流れを極めて単純化して最初に記しておく。

まず『幼獅』は、純粋な思想誌化、その後の若干のゆりもどしを経るが、政治の民主化が進むのと合わせるように終刊を迎えた。『幼獅少年』は読者層の関係で総合誌の性格を維持していたが、救國團自体の国民党からの分離以降はより商業的な誌面作りが変わって今日も月刊誌として続いている。

伝統ある高級中学では現在も校誌編集が続けられているところが少なくないが、国民中学での校誌は次第に規模が縮小し、多くの学校では廃刊されたり、存続してもタブロイド化され規模を大幅に縮小した上で残っているものがほとんどである。一方各地の救國團による地方雑誌は一応今日も発行が続いているが、実際には編集方針は揺れ動いており、部数も全盛期と比べるとかなり減っている。

以上のような出版物は、青少年に文芸創作（後には芸術全般の創作も含む）の発表の場を与える機能を有していたが、その一方で青少年教化機能が重視されている。特に1980年代以前はそれは極めて顕著である。

実はこの種の資料は保存状態が非常に良くない。高級中学の校誌はかろうじて校史館などに保存されているケースがあるものの、国民中学では基本的に廃棄されている。また救國團雑誌は、地域の公立図書館、学校図書館でもほとんど廃棄されているばかりか、発行元の救國團支部でもほとんど保存されていない。

筆者が2014年台南滞在中に調査できた同地区の救國團系雑誌は二種類である。

現在は「大台南市」になっているが、以前は台南市と台南縣に分かれており、救國團の支部は当然両自治体に存在し、発行する青少年向け雑誌も双方に存在した。

前者は『南市青年』である。現在調査できているのは、10号（民國65）～18号（民國66年4月）、24号（民國67年1月）27～28号（民國67年5、7月）、42号（民國69年）～49号（民國70年）である。後者は『南縣青年』で、編集は台南縣北部、もう嘉義に近い新營で行われていた。こちらは12～17号（民國54年）15巻の4、5、9、11号（民國57年）、20巻の4～6号（民國62年）である。

今回は、このうち蔣介石から蔣經國への政権移行期間に刊行された『南市青年』を資料として用いることにする。残念ながら、この期間に限定しても欠号期間は少なくないが、上記のような保存現状を勘案するなら、これ以後も完璧な形で資料が整うことが難しく、ここでやむを得ず一部の資料を元に考察を開始することとする<sup>3)</sup>

『南市青年』は、『青年天地』を前身とした青少年向け刊行物であり、台南市の各学校の学生及び教師が執筆者というのが原則で、例えば校名が無いもの、勤労青年の投稿は掲載されることがなかった。当然読者も各校学生である。

発行は南市青年社。この南市青年社なるものは、台南市育樂街の救國團台南市部にあつて、この雑誌の出版機能を持つ一会社なのだが、実際には救國團の組織である。この時期の発行者は倪超、南市青年期刊社社長が史濟鎧（のち陳長助）、編集李正文、主編：陳麗美（のち羅旭東）であった。後には毎号記載される社務委員として挙がっている34名は基本各校校長であった。つまり、この時期について言うなら台南市救國團という実質的には国民党の下部組織に属するものが編集主体となり、国民党政府の教育部に従う学校組織と合わせて

---

3) 『南市青年』の最近刊行された号は欠号を含みながらも救國團でまだ廃棄されずに残っているものがあるが、民國90年代以降、すなわち救國團自身が国民党組織から離脱して少なくとも形式上民間非政治団体になってからは、相当誌面構成を変えているので、今回は扱わない。

作成していた教育媒体ということになる。

倪超は安徽省出身で、この時期は国立成功大学学長（省立が国立大に昇格後としては初代学長になる）で、救國團台南地区の主任も務めていた。また陳麗美は台湾大学中文系卒で、1974年3月－1976年6月まで臺南市救國團で『南市青年』の創刊から編集長を務めた。75年の学期から臺南亞洲工商高職の國文教師、また救國團が主催する「張老師」講座で教育に当たり<sup>4)</sup>11号の編集を最後に台北に転出した。76年7月から81年3月まで台北市救國團の学校輔導員の業務と同時に、『北市青年』編集長も務めた。その編集長時代の成果は2冊の『北青選集』（台北市救國團）編纂という形で残っている。その後は海外での中国語教育で活躍した。

こうした体制で編集されていた『南市青年』について、今回は蒋介石蔣經國関連の事項に絞ってみてゆく。現在資料で確認できる時期が丁度蔣家父子の交代期に当たり、前掲論文で扱った他の事項、愛国教育や国語重視などはもう少し長いスパンで行われているためである。

## 2. 蔣家関連記事の内容

蒋介石は民國64年（1975）4月5日に没した。各マスコミは当然大きく取り上げた。残念ながらその年の『南市青年』は現時点では調査できていない。今回見られるのは、没後1～2年、つまり、行政院長蔣經國が国民党主席、中華民國総統に就任して世襲が完成する時期である。

前掲論文で示したように、この時期、蔣經國が総統に相応しいことを内外に示すことが重要で、青少年向けメディアも蒋介石の神格化、父子のイメージ（模範的父親とその偉業を継ぐ責任感あふれる長子、更に子の親に対する孝道）の刷り込み、蔣經國を意図的に露出させる方向に進む。

これらが地方青少年誌である『南市青年』でいかに具現化されたかをここで挙げていくこととする。

---

4) 彼女はこの成果で76年3月に全国の「張老師」講座評価の第一位となっており、これが首都台北への転勤につながったと見られる。

### (1) 蔣介石及び蔣經國に関連する特集

蔣介石没後ほどない時期であるから、特集が編纂されたことがある。

10号は民國65年(1976)4月発行で、表紙に蔣介石の写真を当てた「紀念總統 蔣公逝世週年特刊」と銘打たれている。裏表紙には民國58年(1969)3月18日に書かれた蔣介石の墨蹟「精神執中」が掲載され、その対面頁は「中華民國六十四年四月五日午夜十一時五十分」の逝去時刻のみが中央に記されている。また目次の次頁は「日出日没、長城依舊在」の文字の下、蔣介石逝去関係の多くの新聞記事のコラージュ、更に次のページは蔣介石の写真である。

この第10号前半はさながら蔣介石資料集で、収載されているのは次のものである。

#### ① 蔣公遺囑

3月29日付、秦孝儀<sup>5)</sup>が記録し、蔣介石が没した日に士林官邸に駆け付けた幹部たちが署名してオーソライズしたものである。蔣宋美齡が筆頭、次いで副總統嚴家淦、長子の行政院長蔣經國以下五院の長、すなわち倪文亞立法院長、田炯錦司法院長、楊亮功考試院長、余俊賢監察院長が署名しているもので、『蔣家王朝・台湾・1975』<sup>6)</sup>によれば、その後蔣介石の遺影の下に複印されて、各機関に掲げられたという。

#### ② 總統 蔣公病中隨筆

これは行政院長の蔣經國がメモしたもので、15箇条にわたる。基本的に反共復國の考えの正当性と、それが自身の不変の考えであることを述べているが、中で蔣介石が後継と見え、数年来實質的に蔣介石の決定という名目で国政の重要判断を下してきた蔣經國の決定を正当化する文言を含めている<sup>7)</sup>

---

5) 国民党副秘書長、故宮博物院長などを務めた人物で、この当時は秘書として蔣介石に仕えていた。

6) 楊連福『蔣家王朝・台湾・1975』博揚文化事業公司、2012、台北、p86

7) 「經國告美議員、我與匪決無和談之可能、否則等於自殺等語、其意與我完全相同也。」(四項)

### ③ 蔣公懷念集

蔣介石の写真集で計12頁に亘っている。蔣介石が大元帥行営参謀だったとき広州駅や黄埔軍学校で孫文と撮ったもの、以後東征時、北伐時、国民政府主席時代、総統就任後、連合国中国戦区最高統帥だった時、憲法批准時と大陸時代の写真、遷台後金門・馬祖といった前線での写真、最後の一葉は南投で二人の小学生と撮ったものである。特に遷台後は前線写真を除くと議員、学生、学者との写真を主に配しているが、これは台湾の一種安定した状態をアピールするためであろう。

### ④ 蔣公手不釋卷，深愛四本巨著—放置靈柩長相伴隨

これは蔣介石の棺に入れられた4冊の本、『三民主義』、『聖書』、『唐詩』、『荒漠甘泉』<sup>8)</sup>についての解説である。この解説では、蔣介石が生前物質的豊かさより精神的充足を重視し、二冊の宗教書は宗教の、唐詩は中国文学史上不滅の名著であり、三民主義は国を治める要諦であるから、これを持って旅立たせたことは蔣介石の思いを最もよく表現するものだと解説している。

### ⑤ 總統 獎公所佩三座勳章

蔣介石が生前特に好んでいたとして葬儀委員会が遺体に着けた勳章、玉大勳章、國光勳章、青天白日勳章についての解説である。遺体につけられた勳章の解説は、蔣介石の葬儀前の新聞各紙でも同様の解説が掲載された<sup>9)</sup>

---

8) 『三民主義』は、もとより孫文の講義であるが、構想の最後が未完であり、蔣介石自身が民國42年(1953)に補遺を作った。Cowman夫人の“Streams in the Desert”の中訳本で、聖書の教えを解説したもの。中国で流通していた漢訳本はかなり粗悪な訳で省略も多かったので、蔣介石は民國45年(1956)王家楨に改訳を命じている。中華文化復興運動をあれほど熱心に繰り広げた蔣氏父子は、皮肉なことにいずれもキリスト教に帰依していて、蔣經國もこの書物を折に触れ推薦していた。

9) 玉大勳章は民國及び友好国元首のみに贈られるもの、國光勳章は戦功に対し与えられ、一般の勳章の中で最高のもの、青天白日勳章は外敵に対し国を守ったことに対し与えられ、國光に次ぐ勳章である。

⑥ 総統 蔣公紀念歌

李中和が作曲した変ロ長調の歌（作詞は張齡）の楽譜である<sup>10)</sup>

⑦ 公祭総統 蔣公文

葬儀委員会が公表したもので、全文が採られている。

10号のように通常のコーナーを完全に省いての特集号を組む狙いは、陳麗美編集長が下のように述べている。

敬告同學們，應秉尊 蔣公遺訓，勿懷憂以喪志，更須奮勵自強，矢勤矢勇，毋 毋忽，團結一心（10号編者的話）

これを載せることで、学生たちに蔣介石の教えを中心に団結するよう求めているのである。

15号は本篇と別に專輯部分として11次国民大会の関連文書が採録されている。

ここに陽明山中山楼で挨拶する蔣經國の写真を挟んで、含まれるのは以下のものであった。

- ①中國國民黨政綱
- ②中國國民黨反共復國行動綱領
- ③加強三民主義思想教育功能索
- ④中國國民黨十一次全國代表大會通過決議文「堅決奉行 總裁遺囑」
- ⑤第十一次全國代表全黨一致致誠擁戴 蔣經國同志為中國國民黨主席
- ⑥十一全大會發表宣言 號召全黨同志全國同胞加速完成反共復國使命
- ⑦中國國民黨十一次全國代表大會開幕典禮 蔣主席致詞全文
- ⑧中國國民黨十一次全國代表大會 蔣主席政治報告
- ⑨國民黨十一全大會閉會典禮「蔣主席勉同志講真話做實事，為黨國盡責任 為民眾謀利益」

---

10) 同題の歌に秦孝儀作詞，黄友棣作曲のものも出版されている。

- ⑩「繼志承烈，勇當大任」評蔣主席在十一全大會開會典禮致詞
- ⑪「緊緊團結將復國建國大業進行到底」蔣主席政治報告為國人所構繪的決勝藍圖
- ⑫奉行 總裁遺囑，貫徹革命全功
- ⑬讓我們在蔣主席領導下邁向復國的光明前途
- ⑭發揚為黨國戰鬥奉獻的精神
- ⑮「用行動和實績保證大會的成功」寫在中國國民黨十一全大會閉會之後
- ⑯敢擔當有作為的中國國民黨蔣主席
- ⑰「以新的精神與行動，承擔 新的任務，創造新的勝利」十一全大會後全黨同志應有的認識與努力

⑧までが基礎資料であり，⑨以下はその解釈，意味の説明である。講話学習は海峡兩岸とも欠かせぬ政治習俗だったが，この特集はその一つの例である。

特集の編集意図について、『南市青年』はこれらが，十一全大会の重要文献で，学生たちに時事教育の参考資料として提供すること，加えて65学年の時事教育テストの資料になるので，各自仔細に学習するよう述べている。

## (2) 蔣介石・蔣經國の文章

ほとんどの号に「總統嘉言録」という蔣介石の名言集，そして總統嚴家淦の言葉が載せられている。

12号は民國65年（1976）7月刊行であった。この号には蔣經國が3月8日に書いた『梅臺思親』全文が掲載され，それに続き，この文章にからめた『永恆，偉大與堅強的典型－蔣公精神與我們同在』という文章が「我們應有的認識」として転載されている。

蔣經國は，蔣介石の死後ほどなく「守 父靈一月記」を発表しているが，没後約1年して書かれた「梅臺思親」は葬儀期間の様子，また棺が慈湖に移動する際の思い，孫文と父蔣介石を二大偉人として位置づけること，父を想い今後自身がどう進んでいくべきかに思いを巡らす姿を描いたもので，蔣介石－蔣經國という正統イメージ作成と蔣經國の中国的意味での道徳に則った価値観の表



明の役割を担う。

この書をどう読まねばならないかは、たとえば次の文言に現れている。

最近拜誦蔣院長の追念問「梅臺思親」，真寫盡了孤臣孽子之血淚心情。回誦再四，不禁滴淚交下。蓋蔣公已不僅為一家一族之父型祖型的典範，而是所有炎黃子共同追懷仰慕之父型祖型之典範。（『永恆，偉大與堅強的典型－蔣公精神與我們同在』）

この二編に「領袖 慈父 嚴師」を加えた3編は、単独でも公刊されたほか、『慈湖孝思』の名で1冊にまとめられ、黎明文化事業公司から出版された。

18号は「總統蔣公逝世兩週年」（タイトルでは總統に下の空け字が無くなっているが、文中ではこの措置は残っている）の嚴家淦總統致詞全文があり、次いで蔣經國がこの四月初め日月潭で記した「其介如石－父親逝世兩週年紀念文」が掲載されている。タイトルの「其介如石」は馬祖島に刻まれている蔣介石の書の文言である。

次に蔣介石が民國53年（1964）に書いた「先妣王太夫人百年誕辰紀念文釋文」全文、更に次いで蔣經國の「領袖・慈父・嚴師」が一部省略の上掲載された。

### (3) 作文・投稿

10号は特集の後に、蔣介石没後一周年記念作文コンクールでの高校の部、中学の部の入賞作で、「永恆的懷念與青年之奮鬥」（台南高商：陳金時）「青年應如何實踐總統 蔣公遺訓」（家齊女中：儲孟菱）「青年應如何實踐總統 蔣公遺訓完成復國大業」（台南二中：洪玉音）「懷念總統 蔣公・我們應有的作為」（延平國中：汪昭仁）「總統 蔣公人格及其偉大功績」（南寧國中：林清泰）「黑紗」（後甲國中：羅緒文）と、各三位まで紹介されている。「黑紗」がやや感情的な表現になっているとはいえ、どの文章も、抗日、反共、中華文化保護の功績という角度で描かれた恐ろしく変化のない作品群で、各学校でのきちんとした指導と同様の視点での応募作選抜がうかがわれる一方、何を以て序列をつけたか推測できない。

この作品群の締めとして、光華女中校長許興仁の「仁者永生」が置かれている。加えて、『蔣總統秘録』<sup>11)</sup>の読書感想文が続く。

また11号から文学方面の教員を訪問取材する連載が始まるのだが、「(「毎期専訪」)その第1回目は後甲國中の劉程遠である。彼が選ばれたのは、各方面に物を書いていること以上に、高雄市と中央日報が共同で行った『蔣總統秘録』に関する文章募集で第二位になったからである。

14号の寄稿文は政治的なものが多く、安平國中葉瑞山校長「我對總統 蔣公的懷念」長榮中學李逸祥「中國的一代偉人」が蔣介石へのオマージュになっている。

この24号まで投稿者を台南市の國中、高中、高職に限定されていたが、次回から台南市の学生全体に拡大する。その25号は蔣介石没後3周年に合わせて「永懷 領袖」と題した文の投稿を呼びかけ、特に總統への追思を内容とするよう指示している。

#### (4) 関連写真・文物

蔣家関連の写真、作品類も多用された。

10号では前に触れた「懷念集」の写真以外にその後国父記念館に置かれた棺、沿道で跪いて棺の通過を送る民衆の写真が配され、また蔣公墨寶として三幅が並んでいる。

11号の表紙は、億載金城前の蔣公「萬人健行大会」の写真

14号の写真は、原發、北廻線、蘇澳港建設現場で、いずれも蔣經國の十大計画に含まれているものである。特に經濟建設現場見学は、教員の研修旅行の見学場所に設定されており、教員を通じて蔣經國內閣の仕事をアピールすることができる。

15号は蔣介石生誕記念の各行事、すなわち紀念茶会、自強晚會、写生大会などである。

18号は民國66年(1977)4月発行で、蔣介石の遺体が安置されている慈湖

---

11) 日本の産経新聞が民國63年(1974)8月から連載を開始したもの。

が表紙写真。裏表紙は蒋介石が病中で認めた最後の書となった聯が示される。「以國家興亡為己任，置個人死生於度外」で國家に一生をささげたという宣伝である。

24号は民國67年1月31日出版，表表紙は「中原騎馬」と題した蒋介石写真，27号は民國67年（1978）5月出版，表紙は蔣經國，裏表紙は学生の書道コンクール優良作だが，後甲國中の生徒の作品は蒋介石の文章を書いたものである。

### (5) 関連記事・解説

編集部が記すものもあるが，転載も少なくなく，特に国民党と関係する「中央日報」からの転載が多い。

10号「總統 蔣公的感人故事」（転載），吳相湘の「蔣公的特殊歴史紀錄」，魏德邁將軍の「蔣總統－自由的衛士」 陳紀滢「蔣公對文藝界講的每句話都受用無窮」（転載）で終える。

11号冒頭近くに「蔣院長在施政報告中以日常事例說明做人的態度以及做事的道理」が置かれている。これは行政院長の蔣經國の施政報告の中で示した，エピソードを摘録したものである。その中で，車に同乗させてやった童子軍の三人が，下車時に蔣經國に「Thank you」と言ったというもので，中華文化復興運動を推進する身としては英語の礼は不本意だったらしく，教育上重大な問題があるとしている。

「用行動支持蔣院長堅強的政策號召」は9月18日付「中央日報」社説の転載だが，そこで蔣經國行政院長の施政報告の内容を現状に合わせ解説したものである。

毛沢東死去以後の大陸の権力闘争絡みの記事が多いが，「十次革命起義經過」と題した「革命史話」<sup>12)</sup>も抜かりなく配されている。

また蔣經國のエピソードをまとめて「小故事大道理」というコーナーが設け

---

12) 10回の革命は，光緒21年の広州之役に始まり，惠州，潮州黃岡，2回目の惠州，欣廉，鎮南関，欣義上思，雲南河口。2回目の広州を経，最後に清朝を滅ぼした黃花岡之役までを指す。

られる。

15号は国民党15次国民代表大会資料を載せるため12月15日刊行された。蒋介石の語録、嚴家淦総統の國父（孫文）生誕記念日の演説を載せ中華文化復興運動を強くアピールしている。続いて、「青年戰士報」から同運動についての論説を転載すると同時に、蔣經國国民党主席の政治報告を解説している。

16号は民國66年（1977）1月、表表紙は故宮博物院だが、裏表紙は「中国国民党第十一次全国代表大会專輯」という、党旗をあしらったイラストである。この号は定例の蒋介石語録の対面に「蔣院長説的話」として各種談話で彼が引いた小故事がいくつか、更にいつもの「小故事大道理」にも蔣經國のエピソードが記されている。

続くは嚴家淦総統の「全國軍民同胞們」で始まる民國66年（1977）元日の訓話、および鄭彥棻の「迎接光明的一年—開國六十六年紀念獻辭」という長文も載せている。鄭彥棻は国民党の中央常務委員を務め、民國61年（1972）から総統府秘書長として蒋介石の最晩年に仕え、嚴家淦を挟んで蔣經國に総統職が無事渡されるまでの総統府内を差配した重鎮である<sup>13)</sup>

17号は民國66年3月発行、「總統 蔣公對青年的遺訓」と蒋介石語録に続き、蔣院長的話として「一二三自由日告大陸同胞書」が置かれている。

この号では、「紀念總統 蔣公逝世兩周年矢志完成革命遺志」が「蔣公精神與我們同在」というキャプション付きの蒋介石の肖像写真とともに掲載され、また台湾についての蒋介石の功績を開設した「感念 蔣總統光復台灣」が続く。

「從幾件小事情看總統 蔣公」という副題を記した「以國家興亡為己任、置個人死生於度外的氣節」という編集部の文章も加わる。題自体は4)で触れたように蒋介石最後の手蹟の文句であるが、これは編集者が父親から聞き出したエピソードで蒋介石を美化したものである。この号には安南國中の陳玉珍の「永懷領袖」という作文もある。

18号は前にふれたように蔣經國の「其介如石—父親逝世兩週年紀念文」が

13) 彼はこの年、蔣經國の総統就任時に総統府国策顧問に指名され、またその後中国文化大学三民主義研究所で指導に当たっている。そもそも大陸時代の中山大学の法学部長であったように、教育と関係した人物であった。

掲載されている。

それに続く解説記事は「紀念總統・蔣公逝世兩週年加速完成復國建國的歷史任務」「永懷領袖，要發揚孝道精神」の二つの部分から成る。

24号は民國67年1月31日出版，最初は見開きで蔣經國の總統就任を祝うイラスト「我們竭誠擁護中國國民黨中常會臨時會議建議提名蔣經國先生為第六任總統候選人」で，国民が様々なプラカードなどを持って歓迎する様が描かれている。イラスト上部にも「擁戴蔣經國主席競選第六任總統，殷切企盼領導得人全民表達愛戴熱忱」と書かれ，イラスト内の軍民，老少含め多数の人が書き込まれているが，その旗やプラカードに書かれているのは「熱烈擁戴」「蔣院長競選總統眾望所歸」「萬眾同心」「三民主義萬歲」「歡騰鼓舞」「一致響應擁戴」「蔣主席為第六任總統最適當人選」「領導全民完成反共復國大業」などである。

また嚴家淦總統の元旦の国民向け文書，嚴總統六十七年元旦告全國軍民同胞書「握機創勢盡其在我以人伐暴光復大陸」が採られ，加えて大陸情報も載る。こうした挨拶には，孫文，蔣介石が引き合いに出されることが多く，この号もそうである。

27号は民國67年（1978）5月出版，總統語録の対面頁は片手を挙げた多くの国民と笑顔で答える蔣經國を描いた1頁大のイラスト「全民擁戴，四海歸心」が配置された。

次いで4月の國父記念月の嚴家淦總統の挨拶「信心，團結，自強」全文が採られた。この最後の部分で嚴は國父孫文と蔣介石を同列に扱っている<sup>14)</sup>

蔣經國はいよいよ中華民國第六代總統となり，その就任演説「遵守憲法，盡忠職守，增進福利，保衛國家—承受重責大任，無負國民付託」も全文が採られた。新總統の演説や業績の解説も加わる。合わせて副總統に就任する謝東閔の紹介も一つの記事を割いている。何ととっても，この二人は遷臺後協力して救國團を立ち上げたわけで，蔣經國もその点に触れている。

鍾鼎文的「新政府，新時代，新規運」という解説文の後，見開きで總統副総

---

14) 國父與 總統遺訓，如日星河嶽，歷久彌新。

統就任を祝うイラストが配されている。

また詩人羊令野による新たな時代を寿ぐ詩「新歴史的黎明」、卓越の「如何以實際行動在蔣經國先生領導下早日完成反攻復國的任務」が続く<sup>15)</sup>

28号は民國67年7月1日発行。総統語録に続き、前号は蔣經國の写真だったが、今度は男の子と蔣經國を描いた「領袖愛我，我愛領袖」という画。

その後の転載記事は、蔣經國が「読者文摘」（リーダーズダイジェスト）記者の取材に答え6月号に掲載された「中華民國今日在世界上的特別地位和未來的展望」である。

## (6) イベント

10月は中華民國にとって行事集中期間である。双十節に始まり、台湾光復節、そして蔣介石生誕記念日で、これらの記念に幾つもの行事が企画される。13号（民國65年（1976）9月28日刊行）の團務活動予定を見ると論文コンクールや写生大会、スポーツ大会から教師を対象にした音楽会や見学旅行匪情圖片展覽会までであるのであるが、そこにも蔣介石関係のイベントが計画されている。『蔣總統秘録』心得測驗、紀念總統 蔣公誕辰全民團結自強健行活動、紀念總統 蔣公誕辰全民團結自強晚會である。

3月の行事予定は、音楽、行軍練習、軍歌歌唱大会以外に、復興崗美術展や中高対象の「反共愛國論文コンクール」「公祭革命先烈」「紀念革命先烈暨慶祝六十六年青年節大會」「革命史蹟、國家建設及共匪暴政圖片展覽」特に政治性の強い行事は各校が代表を派遣することになっていた。また各中学校では青年節特集の出版物を発行すること、また各中学の出版物・壁新聞のコンクールがあり、そこには革命先烈の犠牲精神や国民が有すべき認識が表現されていることが求められている。

この期の大きな行事は「紀念革命先烈暨慶祝六十六年青年節」と銘打った論文、スピーチ、愛國歌曲コンクール、などがあり、蔣介石没後2周年を記念

---

15) 羊令野は安徽省出身で、大陸時代から台湾時代まで詩作をつづけた。台湾に来てからは国民党軍で「前進報」編集長、「青年戰士報」では「詩隊伍」を作るなど、国防部で、軍中の詩作をリードした。

した「梅臺思親」感想文コンクールもその行事の一つであって、これには各校が代表を派遣して行われた。

## (7) 有獎徵答

『南市青年』はこの時期商品付クイズを連載している。10問（例外的に15号は15問）で、基本は○×式、文章の内容の正誤を判断する形式を取っている。（13号のみ三択）13号のように、毛沢東死去といった特別な時期には、例えば毛沢東が大陸の中国人を6,000万人以上殺害した原因や、毛沢東が減ぶのが必然である理由、反右傾化運動の標的などを3択で答えるなど大陸情勢の問題で締められたこともあるが、基本は大陸現状に関わる出題とともに必ず蒋介石、蔣經國に関する問題が組み込まれる。

蒋介石父子の登場する出題内容は表の通りである。

表 蒋介石・蔣經國関連のクイズ問題

号数	問題NO	問題文
14	1	總統 蔣公曾說：國民必需以守法為光榮、以負責為道德、不以個人的利益、妨害國家的公益。
	6	蔣院長會宣示我們光復大陸的目的、是要解除同胞的痛苦、而不是一切盡復舊觀、更不是翻舊賬、報前仇
	7	蔣院長宣示我們光復大陸後的政策、在政治上不管是首惡元兇、匪軍匪幹、將採不殺、不鬥、不究既往的政策。
15	1	蔣院長曾說：寒流電視劇、非常有意義、他願作為見證人。
	2	蔣院長曾在立法院表示：「我們在對共產主義的鬥*爭中、首先要堅固和健全心理、克服本身弱點、就可打敗共產主義。
	10	總統 蔣公逝世週年紀念日、蔣院長懷著悲痛的心情、曾發表「梅臺思親」一文、以誌哀思。
	11	全國各界於四月四日分別舉行集會、紀念總統 蔣公逝世週年、含哀勵奮、矢志完成 蔣公遺志。
	13	蔣主席號召大陸同胞、精神加盟、行動歸隊、投身反共復國聖戰、認「天安門」火頭將燒遍整個大陸。
16	8	總統 蔣公有一句名言：「安危在是非、而不在強弱；存亡在虛實、而不在眾寡」
	9	總統 蔣公遺囑中的「堅此百忍」是在勉勵大家要以信心為依據的意思表現。

	11	蔣主席在十一次全國代表大會中嚴正的召試中外、不論將來自由世界關係如何變化、我們一定堅守民主陣容、堅持自己的革命人格、絕不和共產集團搞任何權術的、瓜葛的關係。
	12	蔣主席會說：不論公費反覆拚鬥出來的頭目是誰、就是我們的第一號敵人、除開陣前槍彈的接觸、絕對沒有另外的接觸。
18	1	總統 蔣公曾說：「人生最重要的就是要充實其真善美的有目的的生活、與有意義的生命」
	2	總統 蔣公認為大學一書不僅是「初學入德之門」、而且是一種做人做事成功立業的大道理大學問。(本号「其介如石」參照)
	4	總統・蔣公的最偉大之處、在於「國家興亡為己任、置個人死生於度外」。於舉世認為絕望之時、發揮至大至剛的精神、扭轉乾坤、創造奇蹟中之奇蹟。
	5	總統 蔣公的思想和德業、表現了性命之學和經世之學德均衡和統一。尤其在國民革命大業上、表現了一種「其介如石」的崇高的革命人格、革命意志、革命信念和革命精神。
24	4	蔣院長曾指出我們在政治上有七點偏差、缺點和錯誤、其中第三項是各自為正的本位作風。
27	5	蔣總統經國先生發表就職文告、昭示國人復國建國的行動方向：充實國家力量、增進國民生活、擴大憲法功能、確立廉能政治。
28	1	總統 蔣公說：不誠則天下無能成之事、至誠則天下無不成之事

内容は一見難しく見えるが、当該号の論説記事を読めばほぼ正答できるようになっている。そうは言っても、細かく読み込まないといけない。つまり、このクイズを設定することで、通常の青少年に必ずしも興味を持たれていたと思えない蒋介石父子、国民党、併せて大陸事情（当時の表現で言う所の「匪情」）の記事を、真剣に読ませる意図がある。

従って、蒋介石に関する問題で正答率が低かったりすれば、後の編集後記に批判のコメントが置かれることもあった<sup>16)</sup>

ちなみに、この誤答に苦言を呈されたクイズは、そのせいかならぬか、応募者は次は50名に激減した。編集者はこのクイズの狙いは、国の指針や大陸の状況をきちんと読んで欲しく、そのためのクイズなので積極的に応募するよう

16) 十四期の有獎徵答計收到五百多件、答對的只有五十七人。只因同學們太粗心了！如第一題：總統 蔣公曾說：國民必需以守法為光榮，以負責為道德，這題是不對的，見第一頁 蔣總統語言錄。應該是「國民必需以守法為到的，以負責為光榮…」才對。以後希望多用心。(15号編者的話)



求めている<sup>17)</sup>

### 3. 教育部指針等と社会

さて、註2論文で確認したように、この民國65年から2年ほどの間、政府は次のような指示を示していた。それに対し一般社会はどのように対応していたのであろうか。

第一に直接には教孝月活動への参加が主たる指示である。前節で触れたように、国防部も軍人対象に同様の決定をしている。

中華日報も民國66年2月25日に台湾省教育庁は教育部が蒋介石を顕彰するため4月を「教孝月」としたのをうけ省内の各学校に文宣活動をするように通知したこと、講演「講術 蔣公生前忠孝事蹟」論文「研讀「梅臺思親」心得」、特別刊行物、コラム記事などの活動が例示されたことを報じている。

教育部の具体的な指示は「各校は、講演を企画して蒋介石の事績を学び、「梅臺思親」心得などを学習し、影響を拡大することを目指す。もともと蒋介石自身の生前の偉業と忠孝至徳を顕彰するために設定される形を取っているが、ここに「梅臺思親」を持ち込むことで蔣經國の人柄の宣伝を兼ねている。

また次の年には教孝月について、国家精神動員第14次強調会報決議により教育部が4月をこの月に定め実施する。学校では專題講演を行い弁論大会を開いて、蒋介石の孝道を称揚し中国の道徳を發揚すること、教孝の壁新聞を作ることが指示されている。また「守 父靈一月記」「領袖 慈父 嚴師」「梅臺思親」などの読書心得を書き、また慈湖の蔣公總統陵に学生は出かけるなどする。またこれらの内容をメディアは国内外に向け報道することにも触れられているので、実際に蔣家政権の宣伝を企図している<sup>18)</sup> 2月時点の草案は3月には承認されたほか、より具体化されて、各小学校では公私を問わず、校長もしくは教員が蔣院長の「守 父靈一月記」「領袖 慈父 嚴師」「梅臺思親」を講義する。中学は講義とともにテストを行う。高校高職では学生の企画で研修を行い、

17) 「有獎徵答」的不在獎品，旨在鼓勵同學們多看特載的文章，以增加同學們對國是與匪情的認識。(17号編者的話)

18) 教育部公報(66.2.28)「發揚總統 蔣公忠孝至徳，特定每年四月為「教孝月」

学校は試験を行う。5専の4, 5年及び大学, 独立学院は心得写作コンクールを行いまた, 論文コンクールを行う。一等は教育部に報告。また活動報告表を示し, 日時, 場所, 時間, 回数, 成果を記録させている。

特に蒋介石・蔣經國のイメージ形成のために蔣經國の文章を中心に企図された徵文や出版は『南市青年』で拾ったものでも理解できる。

8号青年節論文コンクールの一等に続き, 「梅臺思親」感想文コンクールの「由「梅臺思親」談忠孝」高校の部第一位(家齊女中:楊怡文), 中学の部第一位(金城國中:劉娟娟)の文章が紹介されている。

蔣經國が父の死後公開した「守 父親一月記」「梅臺思親」「領袖 慈父 嚴師」は各誌に載せられ, 国民特に学生は読まされた。これらは, 蔣經國が自ら父を思う孝道の発露と言える行為とも位置付けられた。加えて, 国防部はこの年4月を兵士に蒋介石を思慕し, また孝道を広めるため「教孝月」と定めている。

18号にも収録された蒋介石の「先妣王太夫人 百年誕辰紀念文釋文」, 蔣經國の「領袖・慈父・嚴師」, いずれも蒋介石父子がそれぞれ孝道を守っていた証左の一つとされ, これらの文のあとに二つの論説が収められた。一つは「教孝與教忠」で蒋介石父子の教えを解説したもの, 「釋孝道」は教育部が4月を「教孝月」と定めた意義を述べたものである。国防部と足並みは揃っているが, 国防部は基本的に軍民がその親に尽くすことを主眼としているので, 教育部の決定の方が全民に影響する。あくまでも, 「孝道」が重点ではなく, 「蔣公の孝道」を宣伝するのが企図である。

従って, 『南市青年』もその方向に沿って, この号に「教孝」関連の文章を揃える。即ち

為了配合「教孝月」發揚 蔣公豐功偉業, 忠孝至德, 特轉載幾篇有關教孝的文章, 希望同學們多家研讀, 藉以喚起忠孝至德之精神, 以收齊家報國之功效。(18号「編者的話」)

一般においても『梅臺思親』について, 中華日報と高雄市社教館共催で「南部七縣市研讀『梅臺思親』論文比賽」が行われた。国民に広くこの一文を読ませるためである。教孝月は蒋介石美化のためだが, 「梅臺思親」は蔣經國の美

化を兼ねる<sup>19)</sup>

年前蔣院長發表「梅臺思親」鴻文，誠摯感人，至情至性，凡我國人，尤宜研讀…

これには200余の応募があり，中華日報は優秀作の専集を出している。目的は次のように言われている。

為配合推行「教孝月」，發揚蔣公豐功勳業，忠孝至德，并鼓勵國人研讀蔣院長所撰之「梅臺思親」一文，…………。茲將各組前三名鴻文彙成專輯刊出，藉以喚起國人忠孝至德之精神，以收齊家報國之功效。(4.16)

第二に蔣介石・蔣經國の強調である。

この時期一つの材料が『蔣公秘録』である。これに関して文章が募集された。

対象は南部7市縣の軍人，民衆，學生（高校以上）中華日報と高雄市社協館共済である。

學生の書くタイトルは，「堅苦卓絶救國救世－讀「蔣總統秘録」」「蔣總統秘録是世人的寶訓」と決められており，入選作は中華日報紙上に掲載された<sup>20)</sup>

当該書は民國65年（1976）12月25日付で産経の2年半近い連載が終了した。その終了に合わせ編集委員古谷奎二が蔣介石病逝前後を回想した文章が28日付中華日報に掲載されている。

また蔣介石崇拜につながる行事も指示された。多くの大学専門学校で蔣介石誕生日にその徳を偲び座談会，後援会，スポーツ大会などを企画するよう求められた<sup>21)</sup>

また芸術コンクールのテーマでも，書道については蔣經國總統の言葉を扱うように指示がある<sup>22)</sup>

蔣介石没後2周年も各大学で各行事を行うよう指示している<sup>23)</sup> また「講述

19) 中華日報66.3.18「梅臺思親」論文賽 月底截止收件

20) 「恭讀 蔣總統秘録」徵文比賽 中華日報65.3.5

21) 教育部公報(66.10.31)「北區大專學生崇懷蔣公誕辰，舉辦多項追思活動」

22) 教育部公報(66.11.30)「公告民國67年文藝創作獎有關事宜」

蔣公生前忠孝事蹟」國語演講コンクールも行われた。

10月には誕生日を記念して国防部政治作戰総部主催の「永懷 領袖」美術展が台北で開かれた。蔣介石を称える全体の行事は、テレビで特別番組、中国電視はドキュメンタリー「總統與台湾」、没後2周年特別番組、蔣介石紀念特別プログラム、夜は蔣介石追悼礼拝の特別番組、更に軍は4月一月に亘り國軍戰鬥廣播隊特別番組を毎日30分放送する。

4月5日中央日報の一面トップ記事は蔣介石の写真付きで「蔣公逝世二週年紀念 全民虔誠表達追思 分別隆重集會崇敬」というものであった。一面中央は某会社理事長が出した「實踐總統 蔣公遺訓・完成國家重要建設」という文字広告、最下部は蔣介石父子の写真と「梅臺思親」のダイジェストで、これは松下系の会社が出したものである。

蔣介石を画像で示す動きも盛んだった。台南の社教館は著名な画家張季玉に蔣介石の巨大な画像を描かせた。中正図書館も200に及び画像の特別展示がなされた。そこに含まれたのは1)立志革命黃埔建軍 2)東征北伐 3)五次圍剿萬里長追 4)八年抗戰全面受降 5)戡亂復國中興在望 6)一代完人典範長昭といった内容である。

#### 4. 結 語

中華民國政府及び台湾省政府が蔣介石蔣經國の権力移行期に、蔣介石を美化するために「教孝月」を設定し、「孝」をキーワードに蔣經國の人柄をアピールした。

また蔣經國自身も、自ら次々と文章を発表し、父を顕彰し、父の遺志を継ぐ姿勢を示した。「難忘的一年」「梅臺思親」「領袖慈父嚴師」「其介如石」没後3年目には「風木孝思」でこのイメージを最大限利用した。

国民にこれらの文を読み、学習させるべく地方自治体は感想文コンクールを催し、また蔣介石紀念の各種大会を催した。またその姿を記憶にとどめさせるため、蔣介石の写真、画像、映像などが提供された。

---

23) 教育部公報 (66. 4. 30) 總統 蔣公逝世二週年, 大專院校展開紀念活動

マスコミ、そして企業広告も様々な二人に関連する文書を提供した。

同時に救國團の主催行事に於いても様々な同様の行事が企画された。

これらは、『南市青年』が誌面で行ったことと共通する。マスコミの掲載した「遺囑」「紀念歌」などは誌上に採録されて学生に提供され、蔣經國の政治文書も学生の理解力に関わらず提供された。単に掲載するだけでなく、隅々まで注意深く読むことをクイズという形で誘導した。また蔣介石父子の文章コンクール受賞作も掲載された。学生たちも教師たちも蔣介石父子の事を学び、理解し、理解度を確認するというループに追い込まれた。

この時期、総統の嚴家淦の文章もほぼ一篇掲載されるが、同時に蔣介石の言葉を摘録した「総統嘉言録」、蔣經國が総統に決してから「小故事大道理」などのコーナーで蔣經國の言葉やエピソードが綴られた。

また、表紙も含め蔣介石、蔣經國の画像やイラストは、この時期の『南市青年』でも様々な箇所を提供された。中正図書館の写真展示同様、『南市青年』でもかなりのページを連続で蔣介石の写真に割いたりした。

このように中央の指示を読み取った編集方針は、地方支部発行の出版物でも同様に繰り返され、しかも編集委員に各校関係者が入り込んだ形である以上、あまり応募のなさそうな固いテーマの作文も一定数の投稿が見込め、また各校で投稿作の指導も行き届きやすかった筈であり、学生は二重三重に似たような価値観を刷り込まれることになる。

もちろん、『南市青年』はそもそもが国民党と極めて近い救國團支部が発行しているので、一般の雑誌よりあからさまな編集姿勢が取れたという点は考慮しなければならない。

従って同時期の校誌などの状況も把握する必要があり、これについては次編に譲る。

付記：本論文で使用した『南市青年』は、幸いにも台南市立中正図書館に残っていたもので、これ以外の号は図書館に収蔵されていない。ただし筆者の成大での研究期間、資料調査を開始してから本館改修工事が開始されて収蔵書はごく一部を除き閲覧不能な状態になった。従って今回使用した複写資料の一部は、筆者が帰国後

成大台文系大学院で呉密察教授の指導の下院生であった増田高志さんに依頼して複写していただいたものであり、感謝の意味で、ここに記す。